或る犬の生涯

山田　潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
或る犬の生涯

【Ｎコード】
Ｎ９４６８Ｘ

【作者名】
山田　潤

【あらすじ】
或る家庭犬の生涯です。犬の視点で書いてみました。ペットの幸福とは一体何なのか、彼等の目に人間の行いはどう映っているのか、殆ど筆者の思い入れの物語です。

犬、かくも語りき

初めに断っておきますが、これは僕があなた方人間のいうところの五歳の意識で書いています。幼少期に確たる自我もなければ、あなた方人間に意志を伝える術さえ持っていなかったのですから。

従って、おぼろげな記憶を辿ったものであったり、主人の思い入れによる記述になったりもします。文体が堅いのは、これまた人間がいうところの文系の主人に仕えたことによるものです。アップロードも当然主人に依存しています。僕がキーボードを扱えれば良いのですが、この前足の形状ではとても無理です。主人の肉体を借りて書きあげて行こうと思います。

先ずは自己紹介を。僕はゴールデンレトリーバーという食肉目イヌ科の哺乳類です。血統書に記された本名はアンディ・スカイハイ・JH・JPと長ったらしいのですが、主人は僕をイッポと名付けて呼んでいました。そして、冒頭に述べた五歳などといった年齢を認識するものではありません。暗い時間と明るい時間を千二百回ほど過ごしてはいますが。

だから、犬の年齢は人間の幾つに相当するなどといった乱暴な換算は無意味であるとご理解下さい。そしてストーリーに過度の期待をもたれることなどないよう、お願いします。大きな変化のない暮らしをこよなく愛する僕達です。散歩に連れ出してもらう、友人（勿論、犬です）と遊ぶ、食事をする（餌と呼ばれる類の物ではないものを主人は供してくれました）、排尿、排便をする。ストレス解消のために走り回る。そんな日常を書いた所で、お読みいただくあなた方の興味をそそることなどないであろうと思うのです。

また、誤字・脱字、稚拙な文章、さらには整合性の不一致についても、予めお詫びしておきます。ですがそれは僕のせいではなく、

代筆をする主人の能力が及ばなかったのだ、と言い訳を添えて。

僕が産まれたのは愛知県春日井市というところにある動物病院です。母はサクラと呼ばれていました。母の御主人は医療関係にお勤めになる大町さんという温和な人でした。明るい奥さんと元気なお子さん達、猫も数匹一緒に暮らしていました。

そもそも母が僕達を産むことになったのは、人に譲るためだったと聞いてます。無体な話しです。父親の名前も血統書には書いてありましたが、見たこともなければ育ててもらった恩義もないので省略します。

六頭兄弟で唯一オスであった僕は、岐阜というところに住んでいた主人にもらわれて行くことになりました。偶然ですが、その主人の名前も母と同じ、佐倉（さくら）でした。彼は書物で ≪メスの方が飼いやすい≫ と、いった情報を仕入れ、妹か姉を譲り受けるつもりだったらしいのですが、大町氏の『オスは尻尾をピンと立てて歩くんです、格好いいですよ』との言葉に、心変わりをされたようでした。ただ後に述べる理由で僕は尻尾を上げることなく歩き、主人を落胆させました。

余談ですが、佐倉氏はよく言ったものです。『愛情を伴わない性行為は無意味だ』と。だとすれば僕の出生は無意味なものだということになります。しかし世の多くの犬がこんな風に産まれてくるのです。人間の価値観で計られても困るというものです。

言い忘れましたが、僕は世間一般のゴールデン・レトリーバーと呼ばれる連中に比べてかなり色白です。正確には体毛が白いのですが。そして友人だったジョンも僕同様に白かったように記憶しています。父親がイギリス系だからという理由でしたが、本当の所はよく分かりません。

夜目にも所在が分かりやすい以外は、あまり嬉しいことではありませんでした。汚れが目立ち、その都度あまり好きではないシャワーを浴びせられたのですから。　人間にとってよい香りのシャンプ

ーであっても僕達には迷惑でしかありません。犬のアイデンティティはそれぞれ特有の匂いによるものなのですから。人間であるあなた方には理解出来ないかも知ませんが、僕達が初対面の相手と肛門付近（臭腺）を嗅ぎ合うのは、それが理由なのです。

僕達、犬の視力及び視覚的認識力というものは、あなた方人間のそれに及びません。そのため、優れた嗅覚と聴覚で五感を補っています。僕がシャンプーされた途端に体に泥や埃を纏おうとしたのは、アイデンティティの崩壊を恐れた、言うなれば自己防衛本能に基づく行為だったのです。佐倉氏は『せっかく、キレイにしてやったのに』と嘆いたものですが、本能なのですから仕方ありません。

人間である、あなた方の世界でもよく聞きますよね。【自分探し】という言葉を。よく言えば感受性が豊かなのでしょうね。ですが悪く言えば被害者意識が強すぎる。或いは自己への過大評価が原因なのではないですか？　機会があれば、ご自身を見つめ直してみられるといいでしょう。

幸い、我々犬はあなた方ほど頻繁に自分自身を見失うことはありません。

古の文豪の小説に、猫が語る手法をとられたものがあったと聞きますが、それを真似た訳ではありません。佐倉氏の友人の勧めでこうなったのです。退屈しのぎになれば、と思って書いておりますが退屈を助長させてしまう恐れもあります。繰り返し言っておきましょう。

犬の語る物語などに過度の期待はしないで下さい。

媚びる犬

佐倉氏の家に連れてこられて僕は車という鉄の塊の下に潜り込んでしまいました。初めての場所で、初めての人々に囲まれた訳です。恥ずかしさのあまり車の下に潜り込んだことは説明するまでもないでしょう。

成長するに連れ、誰にでもすり寄って行く図々しさを発揮するようになる僕でしたが、幼い頃には、こんな奥ゆかしさもあったのです。そして、それはあなた方人間も同じですよね。

犬の僕達にも、あなた方ほど発達したものではありませんが、前頭連合野が備わっています。つまり、感情はある訳です。ただ、訓練によって、またそれぞれの努力によって充分な発達がなされていないと、時に本能が感情を置き去りにしてしまいます。

人間にも、そんな方々をよく見かけますよね。主人の佐倉氏など、その典型だったと思われます。彼等の暮らす社会では一人のオスに一人の女性が連れ添うのがルールだそうですが、彼の生存本能、或いは生殖本能というべきでしょうかか。とにかく彼のそれはルールに従ってなかったように見えました。

「俺は直情径行型だから」と、僕に自嘲気味に語ったことも少なくありません。そして今なおこの世に迎え入れてやることの出来なかった魂に詫び続けておられます。それほど後悔するなら、短絡的に行動を起こす前に塾考すべきでしょうに。何度もその旨を告げたのですが、僕のアドバイスは終ぞ聞き入れられることがありませんでした。

そして、そんな佐倉氏を舌鋒鋭く非難する社会の”自称常識人”が、それぞれのペットには何頭（小型犬は匹と数えるのかも知れない）もの異性との性交を強要するのです。優れた遺伝子を後世に残

そうとするのが目的だといわれますが、僕には納得が行きません。それを金銭で売買しているのですから。

「古来は人類もそうだったんだぞ。もっとも、俺の遺伝子が優れているかどうかは分からんがな」と、その件に触れる毎、そういって佐倉氏は自己弁護をしたものです。彼はこちら側の世界に住むべきオスだったのでしょうね。そうすれば多くの非難を浴びることもなく、あまつさえ賞賛さえ得られたに違いないでしょう。そう考えると同情の念を禁じ得ません。

≪媚びる≫人間にとっては良い意味を持たない言葉だそうですが、僕達にとっては極めて重要な意味を持ちます。生存本能に基づいた振舞いであるといっても過言ではないでしょう。

あなた方人間によって野生を奪われた僕達は、同時に生きるための狩りをする能力を奪われてしまっている。従ってあなた方から与えられる食料が命綱なのです。そのためなら媚びもしましょうよ。

尻尾も振るという言葉を、あなた方はよく比喩や暗喩に使っておられますね。僕達をそうさせたという自覚を持っていただければ幸いです。

躾という大義を振りかざし、いうことを聞かないとあげない。オアズケ、待てなど、様々な方法で、その生存本能を抑制しようとなさいますね。本能を抑制出来なければ、僕達をペット＝家族として受け入れてはあげない、そう言っておられるのでしょうか。

酷い話しを聞いた事があります。猟犬として飼われていた犬が、狩猟シーズン終了と同時に、そのまま山に置き去りにされるそうです。翌年にまた訓練された犬を買う方が安上がりだと言う理由で。

あなた方に捨てられ、努力して本来の野生を取り戻した彼等は、野犬と呼ばれます。そして、そんな事情があっても、危険であるという理由で駆除の対象となってしまいます。二重拘束を押しつけたあなた方の手によって。

人間のオス諸兄にお訊ねします。眼前に全裸の眉目麗しい女性が居て、おいでおいでをされたらどうなさいますか？　あなた方の本能への訴えです。人目さえなければ倫理観などひとたまりもなく吹き飛んでしまうのではありませんか？　オアズケはその女性との間に分厚いガラスを張られたようなものです。とても、残酷な行為だと思います。

宦官になった犬

さて、僕が生後半年ほど経ったときの出来事です。『主人への忠誠心の構築と攻撃性の抑制には去勢が有効だ』佐倉氏が図書館で借り出した書籍に掲載されていたその記事のお陰で、僕に厄災が降りかかることになります。

外科手術シーンの描写は語るも涙の物語なので省略しますが、つまり僕は神（主人）に仕える奴隷＝宦官となった訳です。当時の僕に発達した性欲がなかったのが救いでした。後に佐倉氏の意識をお借りして味わった性的絶頂感たるものを知っていたならば、彼への忠誠心は保てなかったでしょうから。

しかし既に失われてしまったものを返せなどといった無理は言いません。人間の女性はそれをよく口にされるそうですね。しかし僕達犬は非常に寛大なのです。

そんな情報がペット関連の書籍やインターネットなどにも多く流布され、まことしやかに語られてはいますが、所詮はあなた方人間の視点からの理解に過ぎません。若しくは統計といった数字の横暴でしょう。言語を分かち合わない我々ペットとあなた方人間との間に、完璧な意志の疎通が計れるはずはないのですから。それは例え動物学者と呼ばれる自称識者様方においても同様なのです。

この主張は、この物語が終わるまで何度も口にすると思います。メインテーマだといってもよいでしょう。また同じ種だからといって我々の全てを十羽一絡げに扱って欲しくはありません。そもそも我々は犬なのです。羽はないでしょう。せめて頭、それが気に入らなければ匹と数えて欲しいものです。

つい興奮してしまいました。

生存本能の一つである性欲を奪われた僕の欲望は大半が食欲に向かってしまうことになります。僕達の食生活について一言言わせて下さい。

『大切なペットの健康のために栄養バランスの取れた食事を』メーカーのコマーシャリズムに乗せられたあなた方が僕達に与えてくれるものは、殆どがドッグフードですよね。あの鼻を突く匂い……正直、嗅覚の発達した僕等には苦行ともいえる食事の時間となっているのです。しかし、それ以外に何も与えてもらえない以上、生きるために食べねばなりません。ドライフードにおいてはもはや、排泄物の始末を第一に考えたものとしか思えません。あの色、形状……明らかにウサギか鹿の糞ではないですか。それを来る日も来る日も口にしなければならない僕等の窮状を知って欲しいのです。

あなた方人間の食生活に置き換えてみて下さい。同様のことを佐倉氏が別のブログに書いておられました。いくら好物でも三百六十五日三食（僕等は成長するとニ食にされました。力士じゃないんですから）同じ物を食する人が居ますか？　例えばカレーライス。三日三晩食べ続けてごらんなさい。大抵の人は肌が黄色くなったような錯覚に陥ることでしょう。

体に良くないと分かっていても美食を追求される方々。百害あって一理ナシを認識したうえで、タバコを止めない人々が居られますよね。あなた方が手にされた選択の自由を、僕達にも分け与えて下さい。週に一日で構いませんから。

その点において僕の主人である佐倉氏は理解がありました。彼はイッポ鍋と名付けたポトフ様なものを毎朝毎晩作ってくれたのです。肉、穀物、野菜を煮こみ、味がなければ寂しいだろうと、ニンニクやコンソメで味付けまでしてくれていました。恐らくこんなことを書けば、彼は愛犬家の皆さんからお叱りを受けることでしょう。それでも彼は止めません。「不味いものを食って長生きするぐらいなら美味い物をたらふく食って早死にした方がいい。美味しい食事は人を笑顔にするんだ」そんな主義を標榜されていたのですから。

気まぐれで独善的な佐倉氏ではありましたが、僕の事は大切にしてくれていました。変な言い方になりますが、生活の半分ぐらいは犬扱いされていなかったように思えます。

おっと、褒めすぎました。彼の発情期（恋愛に関する様々な行為をしている期間）には放ったらかしにされていたことを思い出しました。本来、去勢が必要だったのは彼だったのかも知れません。

吃音の犬

僕は無口です。僕の咆哮（あなた方が犬の泣き声＝ワンであると解釈されるそれ）は、主人である佐倉氏をして年に二～三度しか耳にしていないはずです。

明かしたくない事実ではありますが、これを知ってもらわないと僕の人となり（犬となりといった方が正確かも知れません）を分かっていただけないと思い告白します。あなた方に武士の情けというものがおありなら、くれぐれも他言無用にてお願いします。

実は僕は犬に珍しい吃音だったのです。勿論、僕自身がそう認識していた訳ではありません。よそのご主人様が「うるさいっ」と、いっても吼え続ける友人達を真似てみようとした時、上手く発声できないことに気付きました。そしてそんな僕を指差し（前足で）笑う友人達のせいで、僕は段々寡黙になっていったのです。

ところが、人間の評価というものはおかしなもので、そんな僕を大人しく抑制の効いた犬なのだと判断されました。ここでも、あなた方人間の犬に対する解釈は間違っていたのです。

或る日、僕がたどたどしく声を上げた希有な機会を耳にし、佐倉氏は「お前は吃音だったのか」　と、呆れたように言いました。これはパワーハラスメントになるのでしょうか。彼に悪気はなかったようなので許してあげましょう。とにかく彼のその言葉によって僕は自分が吃音であると理解しました。甘える時、嘆く時のクンクンは発声器官に無理を強いることなく鼻先を鳴らすため上手く出来ていたと思います。短く言葉を切らない遠吠えも、消防車のサイレンに呼応して練習したので、まあまあこなせます。

その僕が吠えた記憶です。自分より大きな四足歩行の動物（後に、牛とか馬とかいう種だと知らされました）に怯えて数回（誓ってもよいですが、僕の生涯において五回は越えていないはずです）。そ

して、あなた方の目に映らない、いわゆるスピリチュアルなものへの畏敬の念で数回、だったと思います。我々があらぬ方向に向かって吠え、さらには毛を逆立てていたとしたら、その時はあなた方の見えない何かが、そこに居るのです。佐倉氏は、何となくそれを理解していたようでした。

同族に吠えたことが一度だけあります。広い公園を走り回っていた僕と友人達を、鎖に繋がれて羨ましげに見つめる赤い毛並の犬に「君は放してもらえないのか？」と、近づいて訊ねる僕の鼻先を、彼はいきなり噛んだのです。温厚で鳴らす僕だったのですが、その無礼さには怒りのウォン（中国の通貨ではありません。声の低い僕の精一杯のワンです）で応えたものでした。

この章の要旨は、あなた方人間の、僕達に対する理解の浅さです。「犬ごときが不遜な」と、申されても事実なのですから仕方ありません。

もの思いに耽る犬

この国はどうなってしまうのでしょうね。被災地では頻発する余震に脅えながら未だに不便な避難所生活をおくられる方々がおられるというのに、統一地方選ですか――お祭り騒ぎをしていられる状況なのでしょうか。そして、こんな時期であろうと彼等の演説は他政党のこきおろしに終始されていましたね、哀しいことです。あの中のどなたが知事に、或いはどの政党が議会を占めようと民の暮らしが良くなることなどないのでしょう。某県の知事に当選された方は、万歳三唱しておられました。過剰な自粛は宜しくないのでしょうが、アレはいかがなものかと。

彼のマニフェストに防災に対する見直しはありましたが、被災された方々への配慮はなかったのでしょうか。自民推薦でしたね。原発推進派なのでしょうか。

『必要悪』　少なくとも、小さなお子さんには聞かせたくない言葉です。北関東から東北の海の中は、環境保護団体が知ったら大騒ぎになりそうな状況だと聞きます。

いや、犬の僕が知っているのですから彼等なら既に知っておられるでしょう。それでも騒動が起きないのは我が国への思いやりか、はたまた彼等にとって環境保護も政治の手段でしかないからでしょうか。

G．P．さんの船も寄り付こうとしないほど恐れておられるのは余震でしょうか？　或いは原発でしょうか？

保安院のスポークスマンの方は、経産省で無類のクレーム処理能力をお持ちの方だと聞いてます。しかし原発に対する造詣はどうなのでしょう。彼の髪型どうこうより、僕にはそちらの方が気になって仕方ありません。悪の権化の如く叩かれている東電の皆さんですが、現場で懸命の修復作業を行っておられる人々には頭が下がる思いです。まさに決死隊ですよね。東電社員の身分を隠してボランテ

ィアに励まれる方も居られると聞きます。
哀しみから立ち上がるために必要なのは憎悪なのでしょうか？僕にはそうは思えません。
『被害の全容が掴めない』そうでしょうね、あれほどの大惨事なのですから。そして人的被害が把握できたとしても、経済的な打撃についてはどうなのでしょう。全て公開されるのでしょうか。ようやくリーマンショックから立ち直りつつあった我が国の経済に更なる、そして未曾有の不況が襲う気配がひしひしと伝わってきます。僕は余計なことを口にし過ぎですか？　犬である僕がどれだけ思い悩もうと何も変わることはないのですね。虚しい限りです。

痛がる犬

あなた方人間は僕たち犬が痛みに強いと思われておられますね、大筋では間違っていませんが、生存本能や忠誠心が痛みを凌駕するのだ、といった方が正いのかも知れません。

以前にも書きましたが、躾という名の基に振るわれる暴力も、主人であるあなた方に見捨てられぬよう耐え忍んでいるだけなのです。

僕と散歩をする佐倉氏に「犬が主人より前を歩こうとしたら、鼻っ面を木の棒で叩くといい」ご近所に住まれていた狩猟を趣味とされていたMさんという方がそうおっしゃいました。冗談じゃない、神経回路の集中した鼻先は僕達の急所です。怯えながら見上げた佐倉氏の目は「心配するな、そんなことはせんよ」と語っており、僕は胸を撫で下ろしたものでした。

Mさんに飼われていた猟犬の諸君が、そんな暴力を日常的に受けていたとしたら痛ましい限りです。そして、シーズン終了時には、山に置き去りにされる運命を知っていたとしたら……佐倉氏が狩猟をしない人間であったことは、僕にとって幸運だったといえましょう。

その彼が僕に振るった暴力は以下のものです。噛みグセの嬌声だといって彼を噛む僕の耳を噛み返してきました。たいした痛みではありませんでしたが不快であることに違いはなく、毎日十分程度それを繰り返されるに至り「こういった行為を、人間は望まないのだな」と、僕は脳裏に焼きつけたものです。口の中を毛だらけにしながらそれを続けられた佐倉氏は、とても奇特な方だったと思います。

僕には持病がありました。≪股関節形成不全≫というものです。病気の詳しい内容については、ググっていただけばお分かりになるはずです。大型犬（日本での分類です）によく見られる疾患で、症状が重い場合手術で人工股関節にしないと歩けなくなる、と最初に

診察された獣医さんはおっしゃっていました。
本来、純血種は人間によって繁殖（この言葉は好きになれませんが）が管理され、問題がある個体は淘汰されるので、こういった遺伝性の疾患は広まらないはずなのです。しかし人気犬種はファッションと同じで、売れればいいだろう的商業ペースで、どんどん広まってしまったのです。欧米ではそんな疾患を持った個体は売買も輸出入も禁止されるそうですから、この国のペット産業の悪辣さを感じさせる事案ですね。
幼い頃には特に気にもならなかったのですが、去勢により食欲に生存本能の多くを振り分けてしまうことになった僕は肥満気味でした。そして増加した体重を支えきれなくなった股関節が或る日悲鳴を上げ、その異常が見つかったのです。
佐倉氏は、どこへ行けばその手術が受けられるのかと、獣医さんに訊ねました。医師の回答は「この辺りではありません。そして人工関節を埋め込むとなると莫大な手術費用がかかります」でした。佐倉氏は金策に頭を悩ませたようでした。僕を実の息子同様に心配してくれたのです。
「ダイエットと投薬で症状を抑えることが出来る。そこまでの重傷ではないでしょう」といった獣医さんの言葉に佐倉氏はほっとした顔をなさっていましたが、後に結局大金を投じることにさせてしまいました。それはまたいずれお話ししましょう。最初に述べた≪僕が尻尾をピンと立てて歩かない≫理由は、腰の痛みに起因していたのです。
足を引きずる僕に、彼と彼の御家族はとても優しくしてくれました。言葉は分からずとも、声の調子に労わりや憐憫を感じたものです、食事の内容も日に日に充実して行きました。僕は覚えました。足を引きずれば、美味しい物が食べられ、独りきりにされる時間が短くなると。
これは、あなた方人間が成長の過程で身につける≪狡猾さ≫ではありません。先人（先犬というべきでしょうか）であるパブロフの

犬によって証明された条件反射だったのです。

身の程を知る犬

幼少の砌に生き別れた母と、大町・佐倉両氏の計らいで再会したことがあります。臭腺に懐かしいものは感じたのですが、僕と母に特別な感慨はありませんでした。

犬という種の前頭連合野に親子愛といったカテゴリーが欠落しているのか、若しくはそれが構築され難い生涯を強いられたせいなのか。いずれにせよ、その点に関してはあなた方人間のそれを大いに評価しいていました。しかし現代では、それも希薄になりつつあると聞きます。嘆かわしい限りです。

我々哺乳類の脳は、幼児期にダイナミックな成長を遂げるといいます。幼くして母親から引き離された僕達はともかく、あなた方人間がそうなってしまうのであれば、すべき努力をしなかった結果であるといえましょう。泣き叫ぶ赤ん坊が要求するのは、子供向けテレビ番組の視聴でも、おしゃぶりでもなく、生身の愛情です。

その代替品として、ゲームやテレビを与えることが前頭連合野の発達を妨げ、人類の財産ともいうべき知的多様性を蝕み、引いては情緒の欠落した今日のような社会にして行くのです。

子育てに楽をしようとしてはいけません。利便性ばかり追求すれば、かけがえのないものを失ってしまう日が遠からず訪れるものです。知力と知性は別物なのです。

神の息吹一つ、涙の一滴で慌てふためき畏れおののくあなた方が、今でも地球の支配者だとお思いですか？神の恵みである天然資源を悪魔のような毒物に変えてしまうような行為がいつまで許されることでしょう。

進化は自然選択の結果だと説明されているようです。ならば或る日突然、それが他の種に起こることも考慮に入れておいて下さい。猿が人間の上位に立つという映画がありました。四足歩行の我々が、

いきなりあなた方の上位に位置することはないでしょうが、ゆっくりと世代交代は進んでいるのかも知れません。しがない犬である僕に警鐘を鳴らされることを恥じるべきではないでしょうか。創造主たるあの方の嘆きが聞こえてきませんか？

失礼、宗教色が濃くなってしまったようです。話を、母との再会に戻します。

母との再会を果たしたのは山間のキャンプ場でした。ペット同伴可といった宿泊施設は近年増えてますが、バカバカしいほどの料金を請求されます。実はこのキャンプ場も同様でした。

佐倉氏は言ってました。「更地にチェックインもクソもあるか、しかも一泊五千円だと？　シャワーも別料金だって言うじゃないか。ラブホテルの方がマシだ」と。

彼の怒りのベクトルは、いつもおかしな方向に行くので放っておくとして、僕はこの小旅行でお土産を持って帰りました。草むらを走り回っていた時に拾ったのでしょう。眉間の左よりに丸いアクセサリーが着いていました。帰宅してからもそれは居座り続け、赤黒く大きく膨れ上がって行きました。それを見た佐倉氏の父は「お前、渥美清みたいになったな」と言ったものです。勿論、僕はその名前の主は知りません。無理に引っ張れば取れなくもなかったのでしょうが、佐倉氏は僕を獣医に診せることにしました。山ダニだったそうです。僕の血を吸って大きくなったのですが、吸い過ぎて膨れあがった彼は、自分の体のコントロールを失ない、そのまま息絶えてしまったようでした。

充分な蓄えがあって尚富を望む人々、年齢を重ねることでなくさざるを得ない容姿に執着される人々、名声といったものを追い続ける人々。彼等の姿がその山ダニにダブって見えます。

僕は身の丈にあった幸福を手に入れ、それに満足しています。例え向上心がないと言われようとも。

抗議する犬

佐倉氏は僕に用いるもの（犬具とでもいいましょうか）の全てを自分自身の身を以て試すことにしていました。

チョークという物があります。主人に従わず走りだそうとする僕達を、リードを引くことによって気管を締める。つまり痛みをもって抑制しようとするものでした。実際のところ痛みは大したことないのですが、長毛種の僕の場合、鎖状のそれに毛が引き攣られ、このまま首の周囲だけが脱毛症になってしまうのでがないかと心配したものです。

僕の危惧に気づいた佐倉氏はご自身の体で試されたようです。彼の首が赤剥けになっていたことから推測しました。そして、これはいかんと思われたのでしょう。革を丸く編んだ衝撃の緩いものを代替品として選んでくれました。「アバクロのチョーカーが買えるわ」とおっしゃってましたから、かなり高価なものだったようです。

また僕を縛りつけるワイヤーという器具を試された時のことです。両端に着けられたスプリングが張りを緩和するから多少引っ張っても苦しくはないだろうと、それに繋がれた首輪を巻いて走りだそうとされました。結果は言うに及ばず、伸びきったワイヤに引き戻された佐倉氏は、後頭部から転倒なさって白目を剥いておられました。彼は犬の僕達が四肢で踏ん張れることをお忘れになっていたようです。

有名なラグビー選手の父親の話です。無駄吠えの多いペットに困り果てたご家族は、吠えると電気が流れる首輪を着けようとなさいました。しかし思い遣りに溢れたその御人は、先ずは自分自身で試してみようと首に巻き、ワンと言った途端、卒倒して病院に運ばれたそうです。

彼等の奇行を書きたかった訳ではありません。あなた方人間の肉体をもってしても、それほどのダメージがあるものを使われる僕達

の様子に配慮していただければというお願いです。
勿論、洋服など問題外です。考えてもみて下さい。僕達犬は一部の種類を除き、真夏でも毛皮を着ているのです。また僕達のようにアンダーコートと呼ばれる下毛との二重構造を持つ種類も居ます。あなた方の自己満足で身につけさせられるトンチンカンな洋服をどれほど不快に思っていることか。気づかれたことはありませんか？
あなた方の可愛いペット君達の抗議の眼差しに。
そうか君は毛深いのだな、と思われた方に説明しておきます。狩猟シーズンには鉄砲で撃った水鳥を泳いで回収に行くことを目的に作られた犬種である僕達です。寒い季節にピンク色の地肌まで濡れてしまっては、いくら体内でビタミンCを生成することが出来る僕達であろうと肺炎になってしまいます。
体毛の少ない方がもてはやされる日本の社会らしいですが、夏は涼しく冬は温かいオフィスと言うところが主な仕事場であるホワイトカラーの方々がされる評価なのでしょうね。

余談ですが僕は雪というものが大好きでした。一面真っ白になった田んぼで、佐倉氏は僕を好き勝手に走りまわらせてくれたものです。そうやって飽きるほど遊んだ後、犬舎に戻った僕の下半身は随分と重くなっていました。
お尻周辺の飾り毛と呼ばれる部分に、幾つもの雪玉がぶらさがっているのですから当然です。なんとか除去しようと佐倉氏や彼の父上が苦心なさっていましたが、融けるのを待つしか方法がなかったことが思い出されます。
以前にも書きましたが人間であるあなた方と犬である僕達では、香りに対する嗜好も異なるのです。体に纏う泥が大地を連想させ、濁った水を口にすることで遥か昔に失った野生を回顧する。そんな時の僕は、主人が呼ぶ声さえ耳に届かなかったものです。
佐倉氏の勤務する会社に出来りしていた方で、昼夜お構いなしにムスクの香りをぷんぷん振り撒いて歩く御人が居られました。嗅覚

の発達した僕は、離れた駐車場からも彼の来訪に気付いたものです。そして近づいてくるその香りに閉口したのは僕だけではなかったようです。

「くさいっ！お前はＴＰＯというものをわきまえてはおらんのかっ」との佐倉氏の言葉にも、ミスタームスク氏は一向に気になさる様子がなかったように見受けました。そういった香りを好む方々は、かつてジャコウネズミか何かだったのでしょうか？　しかしその理論を当てはめると、柑橘系を好む佐倉氏が草食動物だったということになります。

……いやいや、見るからに捕食獣の外見を持つ彼が、そんなはずはありません。恐らく自分と正反対のものに憧れを抱いていたのでしょうね。かくも人間という動物は複雑な思考をなさいます。独りで思い悩み、過ちを悔やみ、なかには自ら命を絶ってしまう個体もあると聞きます。何故なんでしょう？　もっとシンプルに生きればいいではないですか。

理屈っぽい犬

テレビや映画で、主人が投げたボールを喜び勇んで取ってくる犬の姿をご覧になったことはありますよね。それが楽しい連中もいるのでしょう。ただ僕にはそう感じられませんでした。せっかく拾ってきたボールを再び遠くに投げられ、その都度取りに走らされる。何か心に残るものがあるでしょうか？　とても幼稚で非生産的な行為だと思ったものです。

よく僕達を観察なさってみてください。「やれやれ、またか」といった表情をしている犬もいることに気付かれるかと思います。佐倉氏も同様の試みをなさいました。そのため僕は拾ってきたボールを離さないといった行動で、意志表示をしたものです。彼は「それは、お前の獲物だと主張しているのか？」と訊ねました。僕に対して理解の深かった彼ですらそうだったのです。時間通りにドッグフードを与え、排便のみの散歩を面倒くさそうに連れ出すだけの方々に、それを理解してくれと期待すること自体無理なのかも知れません。運動そのものは嫌いではありませんが、出来ればそこに情緒溢れる触れ合いを求めたいのです。

単純労働が精神に及ぼす影響を考えたことはありますか？　機械の一部品と化した魂に感情は不要となり、粗野で野蛮な塊（横棒がひとつ足りないだけで、こうも違います）と成り下がります。僕達への訓練や躾の効果を上げたいと思われるなら、先ずは出来る限りの意志疎通を試みて下さい。言語が違おうと分かり合おうとする努力がそれを成立させるのです。

主人の佐倉氏は、別れた女性達から散々にこきおろされることが多かったようです。コミュニュケーションというものは、どちらか一方の努力では成り立たないということなのでしょうね。しかし僕達ペットやげっ歯類にも話しかけようとしていた姿には感動しました。やはり彼は人類に産まれるべきではなかったのでしょう。彼に

来世があるなら我々ペットと、人類との橋頭堡となって欲しいものです。双方の幸福のために。

発病した犬

或る日のことです。僕の首左下辺りに腫れを見つけた佐倉氏の父上が、僕を病院に連れて行くよう佐倉氏にいいました。

「本当に腫れてるな。どうした？　痛むか？」

佐倉氏は僕にいったものです。痛みより気管を圧迫されることが気になっていた僕は「いえ、我慢出来る程度です。何故こうなったのかは分かりません」と首を振りましたが、結局は病院に連れてゆかれることとなります。

当時、僕の主治医は佐倉氏の自宅から歩いて十五分程度の所にありました。後に聞いたところによると、こちらの先生は年に一、研修と称して奥方と海外旅行を楽しんでおられたそうです。勿論、彼ご自身の甲斐性でなさる旅行や贅沢に、僕などが異を唱えるつもりはありませんが、堂々と「海外旅行を楽しんでくる」と言えなかった背景には、何か後ろめたさでもおありだったのでしょうか。

そして僕は獣医さんが嫌いではありませんでした。生活の糧を求めるべくこの道を選ばれた方、動物の診療に熱意を燃やされた方と、先生方も様々でしょうが、概してアシスタントの若い女性は動物好きが高じて、その職に就かれた方々が多かったように思えます。ですから彼女達の歓待を僕は嬉しく感じたものでした。その点は、佐倉氏とあまり変わらない……いや、恐らく彼の影響でこうなったのでしょう。

しかし頻繁に薬の価格が変動し大きな手術はやりたがらない、この獣医さんに対する佐倉氏の信頼は薄れていったようです。僕の身体に明らかな異常を認めながら「それでは検査結果はまた後日お時間のある時に」との医師の言葉に、彼は即座に主治医の変更を決意なさいました。

動物病院の良否はよく分かりませんが、友人のジョンがかかっていた病院の先生が熱意に溢れた方だと聞いた佐倉氏は、その足で僕

を連れて行きました。繁華街に近く駐車場にはお困りになったようですが、僕を乗せる車のサイズを変えたり、駐車場の空いている時間帯を見計らったりと工夫なさっていたようでした。

そこで下された診断結果は≪悪性リンパ腫≫　血液検査結果報告書、病理検査結果報告書、リンパ腫の解説書と、数枚を手渡された佐倉氏は愕然として医師の説明を受けておられました。犬として軽んじられたのは、彼の父親や婚約者の入院時にあった診療計画書が足りなかったぐらいです。佐倉氏が後日目にすることになる、それらと寸分違わぬ立派な書式のものだったのですから。

あなた方の言語に精通していない僕ですが、佐倉氏の様子と医師の会話から恐らく重病、それも完治を見込めない病気なのだと気付きました。余談ですが解説書にあった「中年の犬に認められることが多い」との行には憤りを感じたものでした。白髪もなく腰が楽な時には、幼少期と変わらず走り回ることのできる僕を中年とは、無礼にも程があります。

以降、化学療法といった治療法がとられることとなります。これまた佐倉氏の父親や婚約者に施されたのと同じものなのですが、僕の場合点滴は免れることができました。発熱にけだるさはあったのですが、最後まで犬らしく扱ってやろうといった佐倉氏と医師の配慮によるものだったのでしょう。通院時の注射と投薬のみの治療でした。

ちなみに僕は薬も苦手ではありません。口に入るものなら、大抵のものは喉を通すことが出来たのです。『熊でさえ口にしない』といわれる栃の実というものを佐倉氏の父親からいただいた時も、何の疑いもなく、それこそ咀嚼する間も惜しんで嚥下したものでした。あの時は三日三晩下痢が止まらず、さすがに焦りましたが。

とにかくこんな調子で僕の緊張感に乏しい闘病生活はスタートしました。通院毎の血液検査、持病の薬にフィラリアの薬と、毎月数万円といった経済的負担を佐倉氏にかけてしまったことは申し訳なく思っています。

闘病する犬

と、タイトルをつけたものの、入院もせず普段通りの生活を送る僕に、病と闘っているとの自覚はありませんでした。腫瘍が大きくなって身体のさばきが悪くなったのと、発熱時にだるさがあった以外、佐倉氏も彼の御家族も、とても優しく……

いや、思い出したことがあります。佐倉氏が恋人と数泊のデートに出た時、父上に「頼む」といって僕を置いてきぼりにした事がありました。

当時の僕の病状は、鼻腔からの出血があり、排出し切れない血液が奥で凝固してしまうと、主に口を使っての呼吸を強いられていました。その僕を置いてまで出かけた彼はどんなお楽しみをしていたのやら。しかも当時彼には奥様が居られたはずです。完全に倫理感が破綻なさっていたのでしょうね。

そんな彼でしたが、さすがに気が引けたのでしょう。夜には父上に連絡をとり僕の病状を訊ねておられたようです。その時の僕は鼻腔の奥の血液塊が上手く排出され、また昼夜冷房の効いた部屋で過ごすことが出来、快適な生活だったと記憶しています。

化学療法の効果のほどはいざ知らず、治癒の見込のない僕としては、残された日々を精一杯楽しく過ごそうと努めました。そんな僕の思いを察した佐倉氏でしたから、彼が作ってくれる食事も日に日に豪華になって行きました。一度など牛の頬肉というのが三百グラムほど入った夕食にありついたものです。狂喜した僕はスープのひと滴まで舐め尽くしました。それまではせいぜい百五十グラムほどが一食当たりの肉の量だった訳ですから当然ですよね。そして、それを今後のスタンダードだと捉えた僕は、翌朝いきなり落胆することになりました。佐倉氏の懐事情を考えればやむを得ないことだったのかも知れませんが、せめて翌日は二百五十グラム、次は二百グラムと段階を追って減らすのであれば犬の僕には気づかなかったで

しょうに。
あなた方人間がお使いになる言葉に≪太く、短く≫と、いうものがありますよね。当時の僕は正にそんな心境でした。老後のために、とせっせと貯蓄に励まれる方々。将来のためにと、お子さんによりレベルの高い教育を望まれる方々が居られます。遠い未来のことばかり考えて、今を疎かにされてはいませんか？　『生命は生まれた時から死に向かっている。そして、明日は約束されたものではない』のですよ。
日々を、その瞬間をひたむきに生きるのが、命を与えられた我々の使命ではないのでしょうか。必ずやってくるものと未来に期待を賭け、今出来ることをしない。或いは先延ばしにするのは怠慢ではないでしょうか。悪性腫瘍の罹患は、僕にそんな意識改革をもたらしたものです。

離脱する犬

化学療法を始めて半年が経ちました。限界です。どうにも体が重くていけません。全身が燃えるように熱く、冷ややかなコンクリート製の床に伏せてみても、すぐに床の温度が上がってしまいます。食欲もなければ、水田を走り回りたいと、いった気力も失せました。佐倉氏にいって、獣医さんに連れて行ってもらうことにします。そして出来るなら、今この瞬間まで僕を可愛がってくれたことを、彼に切々と伝えたいと思います。

彼がやって来ました。意志の支配を逃れようとする身体をなんとか持ち上げて総革張りのソファに寝転んだ僕に佐倉氏はいいました。

「獣医さんに行こう。熱を下げてもらえば、また食べることも走ることも出来るぞ」

僕は同意しました。が、体は動いてくれません。彼は哀しい目を僕に投げかけて、車の準備に向かいました。その時です、急に体の指揮権が僕に戻ったのです。走りだし彼を追う僕を振り返った彼は驚いた顔で僕を見つめて言いました。

「大丈夫か？」と、気遣う彼の心配をよそに、僕は軽貨物車の荷室に飛び乗り……

上手く行きませんでした。なんとか前足だけは上がることが出来たのですが、下半身は腰の痛みもあって車の外に残したまま。「無理するな」と、佐倉氏が抱え上げてくれたのですが、こうまで力を失ってしまった自分自身の肉体が情けなく思えて仕方ありませんでした。

獣医さんでは、急患扱いで順番を待つことなく診察台に上げてもらえました。燃えるような体の熱さは治まりません。体温計は振り切ってしまい、お腹に背中にと冷却剤をあてがってもらうのですが、一向に熱の下がる様子は見られず、頻繁に体温計を挿入される僕の肛門は刺激に反応してしまいました。お読みいただいている方がも

し食事中でしたらごめんなさい。軟便が、勢いよく放出されてしまったのです。

しまった、申し訳なさそうに自分の下半身に目をやる僕に、佐倉氏は「気にするな」といってくれました。しかし大量の排泄物を始末なさるアシスタントさんを見るに至り、牝犬が使う発情期用のパンツでも履かせてもらっておくのだったなと、悔やんだものです。

医師もアシスタントさん達も必死に僕の命を繋ぎ止めようと努力してくれました。彼等の期待に応えようとした僕でしたが、ここで再び肉体の指揮権を失うことになります。

遠ざかる意識の中、佐倉氏の涙に滲んだ顔と「もういい、お前はよく頑張った」の言葉が、強く僕の脳裏に焼きついています。医師の「残念ですが」の言葉に声を詰まらせる彼を見た時の僕は、俯瞰とでもいうのでしょうか――　彼の前に横たわる肉からは離脱し、佐倉氏を見おろす位置に居たように感じます。

辞別の犬

滅んでしまった肉体と共に佐倉氏の自宅に戻った僕は、彼に抱きかかえられてお気に入りのソファに寝かされました。荼毘に付すための準備であちこちに電話で役場に問い合わせ、箱詰めが必要だと聞いた佐倉氏だったのですが、明日まではこのままで、と大きなタオルの上に横たえられたのです。

佐倉氏のお嬢さんや、当時の奥さん、父上や母上が入れ替わり立ち替わり、僕の肉体を撫で別れを告げに来てくれました。そして一人きりになった佐倉氏は大きな声で泣き始めました。「お前は忠実な犬だった」と、涙ながらに何度も魂の抜けた肉体に話しかけていました。あなた方人間が、お通夜と呼ぶ儀式だったのでしょうね。

そして現在です。一度は全ての拘束から解き放たれた僕だったのですが、何故だか再び犬舎が住処となってしまいました。天上から射しこまれた光芒に飛びこむことを躊躇したせいでしょうか。佐倉氏の足音に反応し、彼が見える場所まで足を運ぶ。おかしなことに意識だけの存在となった僕なのですが、繋がれたワイヤーの許す範囲に行動は制限されてしまっています。佐倉氏が僕の方を哀しげな目で見ています。彼の目には在りし日の肉体を持った僕が映っているのでしょうか。それとも僕の気配、或いは面影だけを記憶の中に投影していたのでしょうか。

そろそろ、ここを去る時も近いように思われます。先に逝った友人や姉妹、亡くなった佐倉氏の父親や婚約者が手招きをしているのです。「彼はもう大丈夫だから」と。

以前にも述べましたが、佐倉氏はあなた方がいうところの≪倫理観の破綻した人間≫です。それが原因で多くの人を絶望の縁に追いやり、挙句、その哀しみを全て背負い込んで苦しむような気の弱い人間でした。

その彼にもようやく新しい家庭が持てるようになりました。彼を

苦しみから救いだした女性は、犬の僕がみても、それはキュートな女性でした。正直なところ、佐倉氏のむさ苦しいヒゲ面とは不釣り合いだと思えるほどに。

僕の役目は終わったようです。

「全ての償いが終わった訳ではないが、心を入れ替える」と佐倉氏は宣言なさっておられました。

彼のため、また、多くはないでしょうが彼の幸福を願っておられる方々のために、その誓いが守られる事を願うばかりです。

佐倉氏には二人のお嬢さんが居られます。齢二十歳と十八歳です。彼女達が佐倉氏のような人間の毒牙にかかることのないよう、僕が見守って行くつもりです。

これで僕の独白は終わります。こんなつまらない話に時間を割いて読んでいただいた皆様、厚く御礼申し上げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9468x/

或る犬の生涯

2011年10月31日15時23分発行